

永らくNCAAディビジョンIのOSU(オレゴン州立大)で女子のヘッドコーチを務め、オリンピック選手を輩出、ジュニアナショナルチームのコーチまで務めた日本人女性がいる。その人の名はAKI HILL (HATSUE AKIMOTO HILL)。1995年に17年間のキャリアに終止符を打ち、今は、オレゴン州で悠々自適の生活を送っている。そのアキさんが昨年の暮れに講演会で来日。お話をうかがうことができた。アキさんがアメリカで指導者になった理由、そして成功したそのバックボーンには何があったのだったのだろうか。

前オレゴン州立大女子ヘッドコーチ

## アキ・ヒルさんが語る

# 私がアメリカで成功した理由

アメリカで指導者になる。ましてNCAA I部のヘッドコーチ。アキ・ヒルさんは、アメリカでコーチとして成功した唯一の日本人だろう。その経緯からうかがってみた。

**アキ** 現役を引退した後に2年間、UCLAに今で言えばコーチ留学し、その後結婚して再渡米して、コーチになったのですが、畑龍雄先生(故人)との出会いが、そもそものはじまりです。それは後々お話ししますが、私は、畑先生にいわば弟子入りし、コーチの勉強をさせていただいていました。そこで、先生が指導していた武蔵高校の合宿にお邪魔したり、色々な試合を一緒に見させていただいていたのですが、ナショナルチームの練習を見学に行ったとき、当時、日本の指導をしていたピート・ニューエルさんに「アメリカで勉強したいという人がいるのだけれど」と畑先生から紹介していただいたことが、実際に渡米するきっかけになりました。

日本協会と畑先生の推薦状を持って、ピートさんのいるロスに。「色々

なところで勉強するよりも、一人のコーチに付いてみっちり朝から晩まで勉強するほうがいい」とピートさんからアドバイスを受け、私もそのつもりでしたが、どこに行くのか決まっていた訳ではありません。今考えれば、無鉄砲なものです。ピートさんはUSCに私を紹介する考えだったようですが、日本で英語を習っていた知り合い(後の御主人)の関係でUCLAに務めている方がいて、試しに紹介状をコーチ・ウッデンに届けてもらったら、なんとOK。1972年のことです。ビル・ウォルトンがいて、全米で連覇中のUCLAです。とても驚きでした。ウッデンは非常に素晴らしい人で、挨拶に行ったその日から、リバウンドの用意をするためにハンズアップをする理由はこうという感じで、私はハイヒールにスカートで教わりました(笑)。会った途端に真剣に心を込めて取り扱っていただき、すぐにこの人はただ者ではないと感じました。ウッデンからは、バスケットのみな

らず人間としての生き方に至るまで、畑先生と同様に大きな影響を受けました。畑先生と共通するところが非常に多かったのも驚きでしたね。同時にピートさんや、ステュー・インマンさんに、色々なことを教えていただいたのもこの2年間です。

畑龍雄氏は、日本の近代バスケットの草分け的存在で東大在学中には全日本で優勝経験があり、指導者としては男子の武蔵高校、女子のお茶の水大附をインターハイ優勝に複数回導く等手腕を発揮。1957年~60年、日本協会の審判委員長を務め、東京オリンピックの開催に向け、ローマオリンピックに審判として帯同。そのとき優勝のUSAのヘッドコーチがピート・ニューエル氏で、東京オリンピックに向けて日本の指導をお願いすることになる。

**アキ** 日本に帰ってきてから、出身チームの東京海上の指導をしていましたが、もう一度アメリカに行くなんて、思ってもみませんでした。日本で仕事をしていたアメリカ人の主

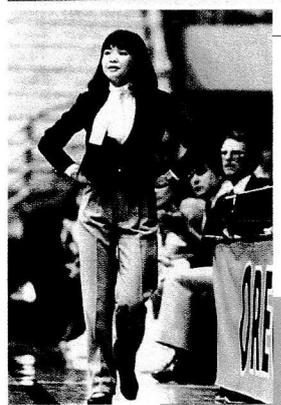
人に結婚を申し込まれていたのですが、主人が国に戻るといって、アメリカではとてもコーチなどできないと思っていたからです。1年間悩みましたが、コーチ・ウッデンから「人間バランスが一番大切」ということをただ強調されるだけでなく、彼の生きる姿勢そのものの中にバランスを感じることができ、それが私の心に触れ、結婚することにしたんです。もう35歳でしたから。今度はバスケットを諦めてアメリカに渡ったわけです。ところが、主人がバスケットをやりなさいと言って、大学に手紙を書いて売り込んでくれたのです。私は、コーチなんて始めたら、のめり込んで離婚することになるから嫌だと言ったんですが（笑い）。手紙にはジョン・ウッデンの弟子、ピート・ニューエル、ステュー・インマンも推薦でしたから、それは驚かれて、反響があったわけです（笑い）。カリフォルニアに住んでいると、そこが国で他の州は外国というイメージでしたので、ウエストコーストが希望だったのですが、オレゴンに興味があって、ビル・ウォルトンがトレイル・ブレイザーズにいましたし、インマンさんもブレイザーズのディレクターをされていたので、知っている人もいるしと、オレゴンにお世話になることになったのです。何も計画があったわけではありませんが、好奇心を持って多くの人と接していく中で、素晴らしい出会いがいくつもあり、それがすべて私を導いてくれたのです。

オレゴン州立大では、大きな選手が入ったこともあって、1年目にカンファレンスで優勝し、全米トーナメントに出場。そこからアメリカでのキャリアが始まりました。ではなぜ成功したのかと言えば、コーチ・ウッデンからも色々なものをいただきましたが、私の指導法の骨格は、そっくり畑先生にいただいたもので、それが非常に効果的だったということです。ファンダメンタルもチーム作りもすべてです。

(P44～、武蔵出身で畑先生の教え子である榎本日出夫氏との対談に続く)



1984-85シーズン。ベンチで指示を出すアキさん



#### アキ・ヒル (ハツエ・アキモト・ヒル)

神奈川県横浜市生まれ。県立平沼高校を卒業後、東京海上火災保険入社。7年間、ガードとして活躍。引退後は母校・平沼高校男子部を4年間指導した後、アメリカにバスケットボール留学。ロサンゼルスに2年間滞在し、当時NCAA連盟中のUCLAのジョン・ウッデンヘッドコーチ（NCAA優勝10回）に師事、同時にピート・ニューエル氏、ステュー・インマン氏にもコーチ学を学ぶ。帰国後、東京海上女子を指導し、関東実業団に昇格。76年結婚のため再渡米。カレッジのボランティアコーチなどを経て78年OSU女子ヘッドコーチに就任。1季目で15勝7敗の好成績をあげ全米選手権出場、2季目にはNWI T (現NIT) 優勝。17シーズンのキャリアで、チームを5回全米選手権に導き、2度NIT優勝。81年には米ジュニアナショナルチームのアシスタントコーチ。卒業生には84年ロス五輪金メダリスト、4名のオールアメリカン選手がいる。OSUでの通算成績は274勝206敗（勝率57.2）

←小さな日本人ヘッドコーチの手腕は高く評価され、ジュニアナショナルチームのコーチにも抜擢された  
※P9写真提供OSUスポーツインフォメーション

特別対談

# アキ・ヒル 榎本日出夫

榎本日出夫（日本コーチコミッティ副会長）

えのもと・ひでお/昭和16年7月7日生まれ、61歳。東京都出身。武蔵中-武蔵高-武蔵大。卒業後、出版社勤務を経て、昭和43年杉野女子短大(現杉野女子大)のコーチに就任。昭和46年から日立戸塚女子チームのプロコーチとして25年間指揮をとり、その間、日本リーグ、オールジャパンでそれぞれ2回優勝。同時に全日本女子代表の監督も経験し、手腕を発揮した。その後、日本本社、ゼクセルと男子のトップチームを指導。現在は、一線を退き、クリニック活動などで選手と指導者の指導にあっている。

——— 今だからこそ伝えたい ———

## 恩師・畑 龍雄(故人)の指導法

コーチングよりティーチングを大切に、  
常に2ウェイで自主性を育てる指導を

NCAAのオレゴン州立大女子のヘッドコーチとして17シーズンのキャリアを積んだアキ・ヒルさん。

その指導の礎、骨格は故・畑龍雄先生の指導であり、指導者としての姿勢だったと言う。

そこで、畑先生の武蔵高校の教え子でもある榎本日出夫氏と共に

その指導法、姿勢とはどういったもので、実際にどう活かされたのかを大いに語っていただいた。

ここに紹介できるのはその僅かだが、  
悩める指導者の皆さんには、多くのヒントになるだろう。

(アキ・ヒルさんの略歴はP8~9)

### 日本もアメリカも コーチング偏重では

アキ「私が今、非常に心配していることで、ピート・ニューエルさんやステュー・インマンさんがとても嘆いていることがあるんです。アメリカはティーチングが非常に少なくなってきた、オーバーコーチングではないかということです。その結果が、世界選手権の惨敗でもあるのではないかと。日本も同じ状況にあると、彼らは言います。彼らは私より余ほど、日本の現状に詳しいですからね」

榎本「僕も60歳で言わば引退して、今はクリニックなどを各地で行なっていますが、色々なところで、多くの方がクリニックを開催している話も合わせての印象は、そうですね。ある選手構成のチームがこういう方法で勝ったといっても、それと同じことをすれば勝てるわけではない。だけれど、興味をもたれるのそういう部分なわけです。典型的な例え話ですが、マンツーマンがしっかりできなければできないオプションのオフenseであるとか、スペシャルのディフェンスを教えてほしいと言われ、それで、実際にやってみればこ

れが足りない、これも足りないということになって、基礎に戻ってしまうことは、よくありそうなことです。だけれど、僕が教えてほしいのはその次からだということになってしまうわけです。そういう傾向はありますよね」

アキ「ストラテジがあっても、それを可能にするファンダメンタルがないということですね。古い話になりますが、畑先生からも同じことを聞いたことがあります。ピートさんが日本のナショナルチームや他のチームのアドバイスに日本に来たとき、大切なことを教えてもらっても、次



ホームコートで100勝のセレモニー。右はOSUアシスタントディレクター

だけで、高校までプレー経験のない選手だったのです。195cmと背は高かったのですが、走れないしジャンプもできないと、彼女が希望しても入れてくれるチームはなかったそうです。それが、3年間でオリンピック選手になれた。では私が彼女になにを教えたかといえば、基礎技術です。大きくても小さい選手と同じようにファンダメンタルを教え、同時にポストプレーヤーに必要な技術を叩き込みました。大きいからといって特別扱いせず、フルスピードで走ることも、プレーの速さも小さい選手と同じことを求めたのです。その結果、オリンピックではファーストブレイクで先頭を走っていました。その基礎がどこからきたものかと言えば、すべて畑先生からいただいたものなのです。それが非常に評価を受けました。アメリカはいいものは取り入れてくれますから、その後はジュニアのナショナルチームのコーチも務めさせていただきました。OSUのチーム作りはもちろんですが、ジュニアのコーチでも畑氏の非常に独創的な基礎は活きましたね。畑先生はあるいいプレーを見ると、そうするにはどう教えるか、そのためにはどういう選手でなければならぬか、その選手を育てるためにはどんな基礎が必要か、と自分でクリエイトされた方です。その点でアメリカのどのコーチと比べても、負けていませんでしたね]

榎本「そういったプロセスが大事で、その基礎技術がなければ、うまくいかなかったときに、戻るべきところがない。先程の話でいえば、スペシャルのディフェンスだって40分やっているわけにはいかないし、それが止められたときどうするのかということにもなる。戻すほみになってしまふんです」

### 5対5に直接つながる困ったら戻れる基礎を

アキ「日本人にありがちな傾向だと思いますが、練習のための練習、練習のための基礎練習というのが、あ

の年にまた同じことを教えてもらわなければならなくて、申し訳ないと言われていました」

榎本「自分の話をさせてもらおうと、畑先生には練習をつくるということを教わった。スキルアップのドリルということになるのだろうけれど、最近は練習をつくる工夫をする人が少ないような気がする。本に書いてあるから（笑）。練習をつくと失敗もある。でも失敗するから、より高度なもの、シンプルなものに変換されて、出来上がったものは分かりやすいものになるはず。自分でつくったものですからね。色々なところのメニューを使ってつくった

ものは、見た目が複雑で、あっちにいたり、こっちにいたりとなりがちになると思う。また、中学や高校生の場合、今年それでよくても、翌年も同じではうまくはいかない。『人間は生れも育ちも違うのだから、Aだと言っても、相手はAダッシュと聞いてしまうかもしれないし、Bと聞いてしまうかもしれない』と畑先生からはよく聞きましたね」

アキ「私がアメリカで実際にコーチになって、最初にオリンピック選手に育ったのが、キャロル・メンケンという選手なんです。彼女はOSUにくる以前は1年在籍した短大で、少しバスケットをやったことがある

るような気がします。時間を無駄にする。でも、畑先生の場合は、このプレーを5対5でするためには、この基礎をやらないとできないというもの。5対5が一変するような効果的な基礎練習を選ぶ。特にアメリカは練習時間が少ないですから、選びに選び抜かれたものをやらなければならないのです。3対3はこのように、5対5はこのようにとやらせて、すぐに効果が出るように。例えば、爆発的なスタートとか、サドンストップ、方向変換と

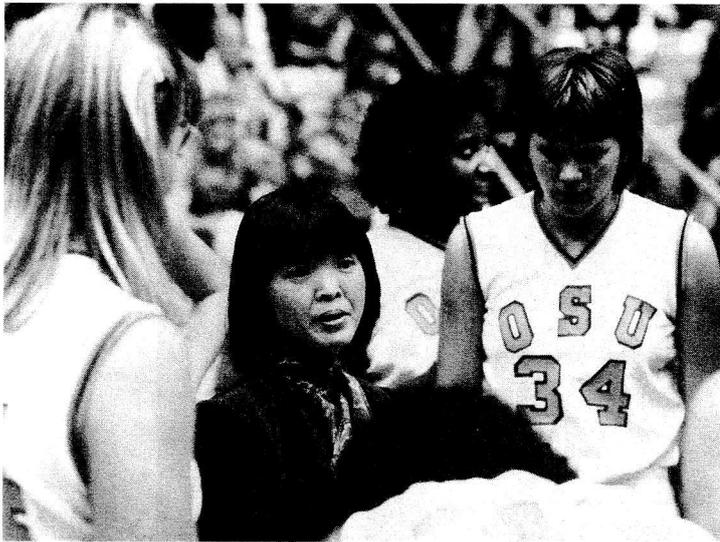
いうようなことは、5対5のトランジションのときに必要な技術だけれど、それを基礎練習と同じリズムでできなければならないわけです。5対5でそれが出来ていなければ、やめて、それをもう一度やらせてから5対5に戻ると、プレーがガラッと変わるような基礎練習。5対5に直結するような練習ですね」

榎本「一番大事な

のは、できるようになりたいかだとよく言われましたね。『出来そうにないと思ったとしても、人間やればできる。宇宙に行けるとは誰も思っていなかったけれど、行けたじゃないか』って。できないから難しいと思うのだけれど、疑わないで、やれると思ってやりなさいと。すると無駄な癖をつけずにできるようになる。畑先生はストレート狙いでしたね」

アキ「何のために基礎練習は必要か、基礎練習をすればどこが変わるのか、コーチはしっかり理解していないといけませんね。機械的なパスの練習をするチームは今でも日本に多いと思いますが、東京オリンピックの頃にこんな話があります。日本のナショナルチームの練習で、ピートさんが日本人は機械的なパスは上手だと

言うのです。でも、オフェンス、ディフェンスの関係を読んで効果的なパスをする能力が欠け過ぎていると。それでパスをするなど（笑い）。1人が本当にオープンになるまでポイントガードにボールを持っていると。そしてそのときに鋭いパスを出せと言って、機械的なパスをやめさせたことがありましたね。ピートさんはビッグマンキャンプで、NBAの選手にファンダメンタルを教えていますけれど、クリエイティブな練習で



①タイムアウトで指示を出す。34番の選手はジュディ・スポストラ。後に日本のNECでもプレーし、現在OSUヘッドコーチ 提供/OSUスポーツインフォメーション

ファンダメンタルをよりシャープにすることを教えていらっしゃいます。それは畑先生も同じで、キャロルが育ったのはその証拠だと思うのです。私も少し工夫はしましたが、すべて先生のメソッドですから。戦術的にも非常に驚かれましたね。一つ例をあげれば、テネシーがファイナル4の前に時差に慣れる目的もあってプレシーズンの試合にきたときのことでした。テネシーはフルコート・マンツーマン・ディフェンスが武器のチームだったのですが、それを積極的に攻める縦パスでことごとく破ってしまったのです。これも畑先生から教えていただいたものですが、フルスピードでディフェンスを押し込んで、ディフェンスの前をカットし、そこに縦パスを入れるといった方法

です。アメフトでもよく使われ、くの字の動きと呼んでおられました。私は相手の一人の選手にやられてカッカしていたのですが、テネシーのコーチ、タッド・ヘッドに『こんなの初めて』と大変驚かれました」

榎本「畑先生は誰でも上手な選手になれると言うんですね。僕たちは武蔵だったから、頭は多少良かったかもしれないけれど、運動能力なんてたかがしれている。だからもっと頭を使おうと。いい選手の凄くいい

プレーを見て、それをやりたいのだけれど、それだけの運動能力がない。それならどう足を出して、どういうドリブルをどの位置に出したら抜けるのか、逆にどうしたら抜けないのかを見ろって言われましたよね。一流選手が自然に出来てしまうプレーを見て、どうすればそれができるのかを次々に練習のアイデアにしてしまうのです」

アキ「その結果、武蔵から運動能力は凄くはなくても、実業団レベルで大活躍する選手が出ましたね」

榎本「技術をうまくさせることで、能力のある人を凌駕しようという考え方なんですよ」

### ルールで縛るのではなく 自発的に取り組む姿勢を

アキ「技術、戦術だけでなく、畑先生の教育者としての姿勢も、アメリカに行って、その素晴らしさを再確認させられるというか、衝撃を受けましたね。武蔵の合宿にも再三お邪魔させていただきましたが、ミーティングが非常に長いんです。でも、誰も眠くはならない。生徒が疑問を言えるし、勝手なことが言えるんです。話し合いで全員が納得し、理解



キャロル・メンケン(左)、ステイブ・ジョンソン(右)のOSU時代。ともに当時のNCAAフィールドゴール成功率の記録保持者。中央がもちろんアキさん

できる本当のミーティングです。そして、ショックだったのはバスケットに対する姿勢です。『バスケットをするのはボールをただただ、追い掛ける喜びのため』それしかない。これは人生の生き方の問題です。すべてがお国のためと教育された戦時中でさえ、こう言い切ったことは凄いことだと思うのです。特に女子はコーチのためとか、チームのため、会社のためという傾向がありましたが、それでは本物ではないと、私も日本の女子を指導したときに強調しました。反対にアメリカは『私の

プレー時間はどうしても少ないの』と平気で言ってくるような個人主義ですから『チームのため、コーチのためにやって本当に幸せに感じられることがあるのよ』と全く逆のことを教えなければなりません(笑)。もちろん、選手が本当は何が言いたいかを聞いてあげて、分かってあげるといことも、畑先生からいただいたことで、していましたが。アメリカの場合は、良く話して理解させてという方法もありますが、まずルールをつくってしまうのです。これに違反したらこういう罰則があ

ると。勉強をしなければ、テレビを1週間観てはいけないという単純なやり方です。でも、そういう訓練は小学生レベルまでだと思うのです。高校生以上、まして大学生ですから、目標を持って、自分から理解して、本当にやりたいから人より苦しい練習を楽しくやってしまえというようであれば本物ではないと思うのです。時間はかかります。ある子は1年、ある子は2年かかってやっと分かるということもありましたが、それでもいいではないかと。ところが、アメリカではなかなかそれが理解されない。躰が出来ていないということになるのです。でも、そのやり方を変えなかったことが、個人の違いを尊重するということにもなりますし、良い結果につながり、長くコーチを続けられたのだと思う」

榎本「生れも育ちも違う人間が、どうやって健やかな一つのチームとして成り立つかということに常に考えている人だったですね。言いたいことを全部聞きましょう、2ウェイにしましょうと。自分も伝えたいことがあるし、君たちもあるはず。そのためのミーティングと、徹底していました。上級生は下級生に言っても、下級生は言えないということがあるけれど、それもやりましょうと」アキ「本当のコミュニケーションがあったわけですね」

榎本「そうですね。そして、自分達に決めさせる。自主性を育てていくのです。合宿にしても、どんな合宿にするのか、その期間に勉強はするのかしないのか、体育館までは歩いていくの？、走っていくの？、バスに乗る？、雨が振ったらと、全部自分達で決めさせられましたね」

アキ「自分達でチームをつくる、チームづくりに参加するというので、私もそれに近付けるようにやってきました」

榎本「一つの例になると思うのだけれど、ボールを磨くか磨かないかということになったときのことで。そうなれば、まず面倒臭いと磨かないわけです。だけれど、汚れば、

磨こうよという話になり、では、上級生、下級生関係なくみんなで磨こうとなった。そんな具合にチームで持たなければいけない常識を、教わるのではなく、自分達がつくっていくという気持ちにさせてくれる指導でした。それが無理矢理でなく、いい伝統になっていく」

アキ「だから本当のエデュケーションなんですよ。それは素晴らしい民主主義のアメリカでもこれだけ高度なディシプリン(訓練)を見ることはできませんでした。私のチームでも毎日練習に参加する前にその日のゴール(目標)を立ててノートに書き、腹の底から『よし、やってやろう』という熱い感情が出てこないうちは練習に参加してほしくないと言いました。『もし1人になる時間と場所がなければ、トイレで座ってでも心の準備をする時間をもってもらいたい』と徹底して。また練習の後には、その反省・結果をノートに書いて1週間に1回提出してもらい、私からの感想を添えて一人ひとりに返しました。そういったコミュニケーションのうえで、本当にバスケットを理解したり、みんなで良いものをつくっていくという教育です。言い過ぎかもしれませんが、日本は昔から命令されて、怒られるのが嫌だからやるという、絶対にイエスの訓練の仕方があったけれど、それが通用しなくなった。昔風では反発される。それは分かっている、そこを破ろうとしているけれど、では新しい方法とは言えば、それができていない。不登校の問題等も親にバックボーンがないということもあるかもしれませんが、そういう問題があるのではないかと思います。畑先生の教育の仕方は、その新しい道を見つけるのにとっても良い参考になるのではないかと思います」

### コーチは教育者でなくとも人間を育てる心構えが必要

榎本「僕が今、クリニックなどで教えに行っているところは強い県でもなければ、強い地区でもない。意欲

はあるけれど、1位になることが目的ではなく、バスケットの知識をしっかり身に付けた選手を育成してほしいというところです。そういう時間的に余裕のあるところですから、生徒を教える前に先生とお話ししましょうという時間を設けています。そこで話すことは、畑先生の『バスケットする心』という文章に述べられていることなのだけれど、簡単に言えば、よほど教える側がしっかりしていないと子供たちに教えられるよということ、そのためには、こういうことに気をつけなければなりませんよ、ということ。アキさんも僕も教育者ではないけれど、コーチはいい人間を育て、いい知識を教えたりすることがとても大切だと畑先生に習ったのだらうし、いみじくもそれをやってきたのかなと思いますよ」

アキ「今の日本に、ミニから中学、高校と一生懸命にやっている先生は沢山いることを私は知っています。それは、私がOSUでやってきたとか、榎本さんが日本リーグの女子で優勝したということと同等のものだと思うし、もっと大切なことだとも思います。コーチ・ウッデンが本当のサクセスはなにかと言えば、結果にかかわらず本当に自分のベストを尽くせたかということだと教えています。そういう態度で続けていけば、勝つべきときは勝つ。NCAAで一番優勝しているコーチが言うのだから、間違いありません」

榎本「僕も日立戸塚時代に、たまたま優勝させてもらったことはあるけれど、いい選手を育て、かつチームをつくって、最大の力を発揮できればいいと思っていました」

アキ「必死にやって勝つことも大切だけれど、子供にとってためになることをやってあげないと意味がない。だからコーチはまずフィロソフィーがなければいけないと、コーチ・ウッデンに言われたことを今でも覚えています。では、私は何か考えたとき、畑先生の『楽しくしょうがないからやるのだ』『そのためには苦勞とも思わない』ということが頭に浮かび、それをモットーにしてみました。それは榎本さんも言っていたけれど、先生の『バスケットする心』を読めばよく分かると思うのですが、どこかに残っていませんか?」

榎本「あれはいいと思います。掲載されたのはバスケットの雑誌ではなかったと思いますが、是非、探してみましよう」

アキ「最後になりますが、今回の来日は、日本SAQ協会に講演者として御招待いただいたこと、また、こういった機会をつくって頂いたことに深く感謝いたします」

(編…榎本氏の御尽力により、畑先生の御遺族から、『バスケットする心』の掲載を快く御承諾頂きました。次号で掲載の予定です)

#### 畑龍雄先生が日本ではじめて試みたこと

(米寿を祝う会資料より抜粋)

1. スクリーンを含んだ独創的なフォーメーションプレーの導入  
※昭和8年武蔵高インターハイ初優勝のときにはオフェンスにスクリーンプレーが取り入れられていた
  2. ゾーンディフェンスの考え方、激しく動くゾーン・ディフェンスの導入  
地域を守るゾーンの考え方。一つのバス毎に5人が激しく動いてディフェンスを構成する  
※昭和13年応召で十分な指導ができなくなった際には、練習日誌の添削などで指導を行なっているが、チームづくりの目標を以下のように計画していた。
- ◎自分たちのチームのことは自分で考えるチームをつくる。  
技術的には

①フットワーク+ドリブルで抜ける	④2-3の動きの激しいゾーンディフェンス
②間に人の入るパスをしない	⑤パスは4種類だけ
③3アウト2インでオフェンス	
3. ゾーンプレスの導入
  4. ボールを見ないで手探りでできるドリブル技術の開発、合理的なシングルハンドショットの試み  
※日本人は手が小さいから無理と言われていたが、昭和25年ハワイの日系2世チームの来日でのプレーを見せられ、先んじて着手。当時、武蔵のオフェンスが日本の注目の的になった
  5. 審判がパーソナルファウルとして取り上げるための3確認事項の表明
  6. ビポットの重視
  7. ボールを動かす速さとその技術